

『ふたりで紡ぐ朝と夜〜7days breaths〜』

特典シナリオ台本

【登場人物】

穂波 羽衣（ほなみ・うい） 20歳

・春生まれ

・経営学部（観光経営学科）

おっとりとしてマイペース、

というよりはゴーイングマイウェイのタイプ。

自分のペースで生きているため、他人の都合を顧みない私の強さもある。

あなたに対しては面倒見のよい姉貴のようにふるまうときもあれば、付き合いの長さから馴れきっていて甘えん坊の妹のような顔を見せることもある。

（あなたに対して、お姉さんモードと幼馴染甘えん坊モードがある）

長い付き合いゆえに、お互いに隠すことなく自分をさらけだしている。

とはいえ羽衣は半年ほど生まれの早いお姉さんのため、

幼い頃は頼もしくリードしてきた。

だから今になっても、格好いいところを見せたい気持ちは強い。

頼りにしてほしい。

「私」が頼りにしてくれるから、羽衣は自信をもって自分らしく行動できる。

バイト、ゼミ、サークルと忙しく充実した大学生活を過ごしている。

高校の頃からバイトの経験がある。お金をためていたのは、同棲のため。

現在のバイト先は最寄り駅の居酒屋（個人店）。

あなた（リスナー） 19歳

- ・冬生まれのため、まだ19歳。
- ・人文学科（観光文化学科）

地元では羽衣と小中と一緒に過ごしてきた。

高校では進路が別れたものの、大学で再び同じ学校に通うことに。

（羽衣が公立、「私」が私立に行ったため）

バイトの経験はない。

ハンドメイドのアクセサリを作ってネット販売しており、

最近はその軌道に乗ってバイト代わりになりつつある。

家で過ごすのが好き。

羽衣の交流の広さ、コミュ力を「すごいなあ」と思い憧れている。

「私」にとって羽衣は幼少のころからのメンターであり、尊敬している相手であり、どんなことも相談できる姉のような存在。困ったときは羽衣を頼ればなんとかなる、と経験則で知っているので、「私」も安心して色んなことに挑戦できている。

過保護気味の親からはバイトより勉学優先と言いつけられており、バイト禁止。そのぶん、羽衣よりも多めに家事を担っている。

【あらすじ】

ふたりは大学生の2年生。

地元が一緒に、幼い頃からともに育った幼馴染。

高校では別々の学校に進んだものの、同じ大学への進学を機に、
地元を離れて一緒に暮らすことに。

ルームシェアをすれば安上がりだからということでも互いの親にも許可をとり、
新居を決めた。

そのときはすでに恋仲の関係。

親たちには関係を打ち明けないまま、内緒の同棲生活を始める。

ヒロイン・羽衣にとっては、「私」は必要な、なくてはならない相手。

そう気づいたときに、恋人になりたいと願った。

アプローチしたのは羽衣からで、初恋同士。

お互いの気持ちが「仲のいい友人」と「恋人」の境目をどう超えたのか…と気になっている。家族同然の付き合いをしてきたので、「私」がちゃんと今の関係を「恋人」だと実感しているかどうか気がかり。

ずっと同じ関係じゃいやなのだと踏み出したのは羽衣の方から。

「私」も、嬉しく受け止めている。

【day1：月曜日】

○自宅・寝室

【朝、今週の計画】

羽衣は私と同じベッドで一緒に眠っている。
心地よさそうな寝息が聞こえる。

「（寝息）……………ん……」

「すう…すう……………」

「（寝返りを打ち）んー……………」

「（身じろぎ）んー……………」

「^ぐそそそと枕もとを探る羽衣。

「（あくび）くう…………ふわあ……」

「んー……」

目を覚ました羽衣、スマホの画面を覗き込む。

「（低く囁きで）あー……」

「月曜日だあ」

「（私の耳元へ、笑いながら）月曜日だぞお……」

「おはよ」

「んー……起きよ……」

伸びをして、寝返りをうつ羽衣。私に抱き着く。

「（抱き着きながら）んー……」

「んー……（段々穏やかな呼吸になる）」

「……すう、すう……」

二度寝をしかける羽衣。

私が揺り起こすと、目を覚ます。

「んあ。起きる……起きるう……」

「（寝返りを打って）はあ」

スマホを手に取り、画面を眺める羽衣。

「あー。起きなきゃあ」

「んー……」

「……今日のご予定は？」

「わたしはあんまり遅くないと思う」

「晩御飯、なんかつくろっか」

「お惣菜買うのもアリ」

「食べたいもの、思いついたら送っておいて？」

「さて……起きよっかな……こんどこそ……」

「（みじろぎ）んん……んーっ……」

「起きる……ぞ……」

「あゝゝゝ。もうちょっとだけえ」

私に抱き着く羽衣。

「まだちょっと時間あるし……」

「（私に抱き着いて）んぎゅう……」

「（落ち着いた心地で）ふー……」

「（穏やかな呼吸）……」

「（ほとんど無音の呼吸）……」

羽衣、一瞬寝落ち。即座に起きて慌てる。

「うあつ。あー、だめだめ。寝ちゃう寝ちゃう」

「はあー。だめだよっぱ。おふとん、寝すぎる。眠すぎる」

「身体を起こそう。……いったん縦になろう」

「いっせーの、でね？」

私とタイミングをあわせてベッドから起きようとする。
目を合わせ、間合いをはかるふたり。

「いっせーので。いくよ？」

「いっ、せー、のお……」

「せっ……」

ふたり、言葉だけは威勢がいいが、身体はベッドに横たわったまま。

「（笑って）……いかないじゃん」

「ほらあ、いつ、せー、のおお……（私の出方を窺って）」

「（仕切り直す）いーっせー……の……?」

「……せえいつ」

上体を起こすふたり。

「そんで、せえいつ」

「わー……いい天気」

「はー、ふああ……（あくび）」

「（あくびをひきずりつつ）んー、今週はあ……」

スマホで予定を確認する羽衣。

「バイトは明日からでー」

「あ、金曜は飲み会です」

「ん、でも早く帰ってくるかなあ」

「送別会っていうか、でもあんま絡んだことないひとのだし」

「……週末どうする？ 出かける?」

私、迷っている。どっちでもいいなという意思表示。

「（私の返事を聞いて）んー、家でごろごろするのってのも……」

「（嬉しそうに）贅沢な過ごし方でいいよねえ」

「（大きなあくび）……ふわぁあ……」

「（あくびの余韻）くう……」

「……あれ。なんかメール——」

お互いにスマホに受信があり、メールを確認する。

「……お。二限、休講だ。ね？」

ふたりでとっている講義が休講になった知らせが届く。

「……ってことは——？」

羽衣、カーテンを閉める。

「（布団にもぐりながら）ええい」

「ふふっ……」

「（私の耳元へ）もうちょっとだけ、寝ちやおっか」

「（スマホを操作しながら）アラーム、セット、……OKっと」

「（私の耳元へ、笑い混じりに囁く）……おやすみ」

【夜、あたたかい背中】

寝る支度を済ませ、寝室に入る私。

羽衣はすでにベッドの中で横になって、スマホをいじっている。

「おー、おいでおいで」

羽衣、布団を持ち上げて私を招く。

布団にもぐる私。

「きたきた♪」

「よおーしよしよし……」

私を撫でる羽衣。

お風呂上がりの私を抱きしめ、満足そう。

「ぽかぽかさんだなあ」

「……ちょっと暑い」

「（寝返りをうち）……んしょ」

「ふー……」

「（落ち着いた吐息）………」

羽衣、スマホでSNSなどを眺めている。

「（私へ視線を向けて）……ふふ」

「見てこれ」

羽衣、私へスマホの画面を見せる。

カフェの情報が載っている。

「ねー、気になるお店。学校から近いよ」

「プリンが美味しそう。固いやつ」

「クリームソーダも、見てこれ。きらきら」

「こーいうの、好き」

「（私も気に入った様子に満足して）……ふふ」

「うん。行こ行こ♪」

「……へへー。楽しみ……」

「てか見てたらちょっとお腹空いてきたあ」

「（首を横に振って）……いやいやいや、食べない。あぶない」

「もう齒磨いちゃったもん。食べない」

「……その代わりにー」

「（私に抱き着いて）ぎゅうー……!」

「（満足して笑う）……」

「すうう……（私の背中を嗅ぎながら呼吸して）……はあ」

「（私の首に顔をうずめて）ここ好き」

「（深呼吸）………」

深呼吸を繰り返す羽衣。

「ふう……」

「ん。充電」

「明日からは、ちよくちよく遅くなるかもだし」

「うん。シフトがねー、夜ばっかで」

「今のうちに、いっぱい充電しておかないと」

羽衣、私の首筋あたりで深呼吸を繰り返す。

「……すー、はー……すー、はー……」

「（小さく笑う）……ふふ」

「すー、はー……すー、はー……」

「ふあ……（あくび）」

「（穏やかな吐息）………」

段々眠くなっていく羽衣。

「うあ……ねむ………」

「ん………、んん………」

「……（寝息）すー……すー……すー……」

【 day2：火曜日 】

【朝、ベッドのなかからお見送り・】

朝。

化粧台の前で化粧を終えた私。

出かける準備が完了した。

ベッドに近づき、まだ眠っている羽衣の様子を窺う。

「（寝息）すー、すー……」

「……んん。……」

寝返りをうつ羽衣。

「んー……」

私が出かける直前だと気づいて、うつすら目を覚ます。
が、意識の半分以上はまだ夢の中。

「んあー…………」

「……ん……」

私に腕を伸ばす羽衣。

「（甘えた調子で）おはよお……もう出かけちゃうの？」

「そうだった……早いんだっけ……」

「んううう……うゝ……」

眠気に抗いつつも、抗いきれない羽衣。

「もーちょっとだけー……」

「んんうう………」

「もっとー……」

「（私の腰に抱き着いて）んぎゅうーっ」

「ふー……」

「ん、いってらっしゃあい……」

「（キスを要求）……んーー」

「（軽く口づけあって）ちゅっ。……ふふっ」

「（顔のすぐ近くで）わたし……今日帰り、遅い……」

「先に寝てていいから……」

「……行ってらっしゃい」

眠気に負けつつ、でも見送りたい気持ち。

「きをつけて、ねー……」

「………ん……」

「………」

呼吸が寝息に変わっていく。

「……すー、すー……」

私はそっとドアを閉めて、出かけていく。

【夜、おかえりの口づけ】

夜。

私が寝室で眠っている頃に、羽衣が帰ってくる。

「（靴を脱ぐ）ん、しょっと……」

「（うがいをして）がらがら……」

「（吐き出す）んぺ」

「（うがいをして吐き出す）がらがら……、ぺ」

「（一息つく）ふいー……」

「………」

私は、帰ってきた羽衣に気づき、ちょっとだけ目を開ける。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

以降、羽衣の声はほんの囁き声。

「いいよいいよ、寝てて」

「わたしも、あとシャワー浴びて寝るだけ」

「ん、ごはんたべた」

「……なにか残ってる？」

「（嬉しそうに笑って）じゃあ、それは明日の朝ごはんにするー」

「……ありがとう」

「……んー？」

私に呼ばれ、羽衣、ベッドのそばへ歩いていく。

「なーに。呼んだ？」

羽衣、ベッドの傍らに膝を突き、私へ耳を傾ける。
私は羽衣へ、不意打ちのチューと『おかえり』を伝える。

「あ」

「（喜んで）『ちゅっ』ってしたあ……！」

「へへへー。ただいまあ」

「ほら、もう寝ちゃいなくて。すぐ戻ってくるから」

「ね？」

「……おやすみ」

「（おでこにキス）ちゅ」

「（耳元に囁きで、早口気味に）おやすみっ」

「（私の頭を撫でて）よしよしよし」

「（満足そうに）……ふー」

【 day3 : 水曜日 】

【朝、寝かしつけるリズム】

私は、ベッドから腕を伸ばしてカーテンを開ける。

羽衣、目を閉じたまま、窓から入る陽射しから逃れるように寝返りをうつ。

「……ん」

「んん……」

「……………」

羽衣は、まだ眠っている。

私は、それからしばらくベッドのなかでスマホを眺める。
時折、羽衣の寝顔を見る。

「（寝返りを打って）んん……………」

背中にぴったりくっつく羽衣。
寝息が聞こえてくる。

「すう…………すう…………、すう…………すう…………」

「ん…………、すう…………、すう…………」

「ん……………」

私は、羽衣を起こさないようにベッドを抜けようとする。

「（不満げに）んんん…………」

羽衣は私の背中を抱きしめ、ベッドから出すまいとする。

羽衣は目を開けるのはつらい程度の覚醒具合で、
気を抜けばいつでも二度寝できる状況。

私と言葉を交わす間も、目は閉じて、
声も聞こえるかどうかくらいの声量。

「（眠たそうに）……だめ」

「……ここにいて」

私はあなたへ向き直る。

羽衣を抱きしめ返す。

「（満足して）……ふふ。ふー……」

二人、向かい合って抱き合い、落ち着く姿勢を探る。

「はぁ……。これこれ……♪」

羽衣、満足そうに息をつく。

「……ふふ」

「（囁き声で）おはよー……」

「寝ちゃう？ このまま」

「にどね」

「……だめ？」

羽衣の誘いにあらがう私。

羽衣は残念そう。でも、諦めずに抱き着く。

「……ねちゃえよ。ほらぁ」

「お布団こんなにぽかぽかなのに」

私は、あなたの背中をとんとん叩き、寝かしつけようとする。

優しくゆっくりとんとんする。

「（気持ちいいけど、抗って）んあ……あゝ……あゝ……」

「それは……だめえ……あああ……」

「背中あ……とんとんするの……気持ちよくなっちゃうからあ……」

「だめえ……」

「だめええ……」

「んああ……はあ……」

「……むり……もう……」

「あー……あー……ふああ……」

「（ゆっくり呼吸）……」

「（段々寝息に変化）……」

「（完全な寝息）……」

羽衣の呼吸が完全な寝息に変わる。

目を覚ます気配がないことを確かめてから、私はそっとベッドを抜けていく。

極力、音を立てないように、静かにドアを開け、閉じる。

【夜、壁越しの気配】

私は、ベッドに座った姿勢。下半身は布団のなか。本を読みながら羽衣の帰りを待っている。

ほどなくして、玄関のほうで物音がする。

日付が変わりそうな時刻。

ご近所さんに気遣って小声で。

「ただいまあゝ……」

「（うがいをして）がらがら……」

「（吐き出す）ぺ」

「（うがいをして吐き出す）がらがら……、んぺ」

「（一息つく）はふ……」

羽衣、『もう寝てるかな？』とそっと部屋の中をうかがう。

「……」

私がまだ起きていると分かり、嬉しそう。

「あゝ………♪」

「寝ない子、だゝれだ？」

「……わたしもだ」

「………（笑う）」

「本読んでたの？」

私、ベッドを下りようとする。それを制する羽衣。

「ん、いい、いい、そのまま。お気遣いなく」

「では、失礼します……」

羽衣、部屋に入り、ベッドのそばへ。
膝について、私のふとももを枕にする。

「……すんすん」

私のお腹のあたりを吸う。

「（匂いを嗅いで、深呼吸）……ふー」

「お風呂入ったばかり。でしょ？」

「匂いでわかる……」

「というのはウソで……」

「洗面所、まだぽかぽかしてたから」

「（深呼吸）……」

「……あゝ、ぽかぽかで良き」

「……んふふ」

「はー………」

「やば……寝る……」

「（うとうとして）………」

「あー、だめだめ、寝ちゃう。まだお風呂入ってない……」

「うわぁー……お風呂めんどくさいよ」

「……がんばる。がんばるがんばる」

「よしっ……（立ち上がりながら）いく、ぞっ……」

「……えらい？　へへへ、えらいでしょ」

「じゃあ、行ってきます」

部屋を出て行く羽衣。

ほどなくして、壁越しにシャワーの音が聞こえてくる。

「（熱いシャワーを浴びて、気持ちいい）あゝ………」

「……ふう」

「洗顔、洗顔……（クレンジングフォームを泡立てる）もこもこ……」

「（顔を洗いながら）んー……、ふう」

フォームを洗い流す。

「っと、とと、わわっ!？」

「（クレンジングフォームを足の上に落とす、痛くて呻く）ぬあっ……!」

「ごめん……っ、なんでもなーい！　手元狂った」

「ふー……」

「（熱いシャワーが気持ちよくて）うぁー………」

「（鼻歌を歌う）……♪」

髪と身体の泡を流す

「はぁ〜……」

「……よしっ」

リンスを洗い流し、身体全体を流す

「ふー」

新しいヘアオイルを下ろした羽衣。

上機嫌に鼻歌を歌いながら髪になじませていく。

「（鼻歌） …… ……♪」

「……よしっ」

「ジャジャン……」

「ほかほか羽衣さん、お届けです……」

「ほら〜、いいにおい〜っ」

布団に潜り込む羽衣。

私に抱き着き、得意げに。

「……どう？ ほかほかでしょ」

「……（笑う）」

「ん、さっきねえ、チューブ足の上に落とした、ツルツて」

「洗顔の。けっこう中身入ってる」

「わたしもびっくりした」

「（私に甘えて）痛かったよー」

「（私に頭を押しつけて）うりやりやりや……」

私の鼻先に頭部をつきつける羽衣。

「これ、嗅いで嗅いで」

「……（わくわく笑いつつ待つ）」

羽衣の髪からいい匂いがする。

私が気づくと、羽衣も嬉しそう。

「ね？ 良い匂いでしょ」

「新しいヘアオイルをね、下ろしました」

「いつものやつ、売り場になくて。だからいったん繋ぎで」

「完全にパケ買いだけど、好きなにおいした」

「……（匂いを吸い込む）……はあ」

「ね、いいにおい」

「明日から使っていていいよ。使って使って」

「おんなじ匂いになろうよ。ね」

「へへ、やった」

「……はあー」

「あー……ねむ……」

「……ふわあ（あくび）」

寝返りをうつ羽衣。

ベッドの上で座っている私の腰に抱き着く。

私は腕を伸ばして、羽衣の背中を軽くたたく。

「……あー、とんとんだめ、寝ちゃうからダメ」

「これさあ……今朝すっごい寝ただけど」

「わたしのこと寝かしつけるの、どんどんうまくなってくでしょ……」

「こわいわあ……（くすくす笑う）」

「……んああねむい……」

私、もう寝ちゃえばと羽衣に促す。

羽衣、まだ抵抗している。

「……歯は磨いたけど……寝れるけどお……」

「でももっと、せっかく一緒にいるんだし……」

「あゝ……でもむりかも……ねむ……」

「ん……」

「……明日、早い……起こしてえ……」

「（寝入りながら、曖昧に）おやす……み……」

「……………（寝息）」

「すう……すう……、すう……」

羽衣は私に抱き着いたまま寝落ちする。

【 day4 : 木曜日 】

【 朝、忘れものに注意 】

朝。

スマホのアラームが鳴る。

「ん……ん……」

羽衣はまだ眠たそう。

だが、今日は私よりも羽衣のほうが先に出かける予定。

私もまだ布団の中。

私は羽衣を揺すり起こす。

「んあ……、う……」

寝返りを打つ羽衣。

「……んー……」

私に起こされる羽衣、まだしっかり目を閉じたまま。

「おきる……ちゃんとおきる……」

「だいじょう……ぶ……」

「ん……」

「んう……」

眠気に抗おうとしているが、劣勢の様子。

「……………」

「すう……すう……」

仕方なく私は布団を半分はぎ取る。

「うーっ……」

私のほうへ寝返りをうつ羽衣。

「んっ、んっ………」

「わっ。今日、午前からだ」

「やばっ」

「おはようっ」

「ごめん、起こしてくれてありがと……!」

羽衣はベッドを下りて、慌ただしく身支度を始める。

「（着替えをする息遣いで）……………」

「……………」

「よしっ」

寝室のドアを開けたまま。

洗面所からの物音が聞こえてくる。

「いやゝ、時間やばやば……」

「んー（ちょっと悩んで）……日焼け止めだけでいいか」

化粧台に向かい、顔に日焼け止めを塗る。

「えーと、忘れ物……は、ないっ」

「あったら諦める」

「……よし」

「（スマホで時間を確認し）……間に合う」

まだ寝ている私の耳元で、

「（囁き声で）行ってきますっ」

「……あっ。忘れてたっ」

羽衣、部屋を去りかけ、引き返す。

あなたのほっぺにくちづける。
軽くスキップのキス。

「……んむっ、ちゅっ」

「ふふー。この忘れ物は、諦めないやつ」

「（囁き声で）……じゃ、行ってきます」

羽衣、出かけていく。

ドアが閉まる。

【夜、寝る前のお手入れ】

私はお風呂上がり。

寝る支度を済ませ、ベッドの上でスマホを眺めている。

ほどなくして、羽衣も入浴を終えてやってくる。

「あゝ、今朝は焦ったなあ」

「起こしてくれてありがとね」

「なかなか起きなかったでしょ」

「いつも苦勞かけるねえ……。これからも頼むよ」

「助かってる。ありがとっ」

「お礼といっはなんですが……」

羽衣、ベッドに上がる。

私の左隣に身を寄せる。

「これ。そろそろ、いかがですか？」

ネイルオイルと爪やすりを布団の上に載せる。

羽衣は私の左手を取って爪の長さを確かめる。

「おねえさーん、爪が伸びた頃じゃないですか？」

「任せてまかせて。では、こっちの手から……」

「ん……（確認しながら）ふんふん……」

「（愛しげに微笑み）爪ちっちゃいねえ」

私の左手の指を一本ずつ撫でる。

「はい、じゃあはじめます」

親指の爪からやすりがけを始める。

「痛くしたら、ごめん。すぐ言ってね？」

「……おやゆび。 （爪を磨く息遣い） ……」

「……」

「……あ、スマホ見てていーよ」

「（楽しそうに笑って）勝手にやらせてもらいます」

「……はい、つぎひとさしゆび」

「（爪を磨いて） ……ん ……」

「（気遣いで） ……くすぐりたい？」

「……ふふ。くすぐったがりさんだねえ」

「……はい、なかゆび」

「……… （作業する息遣い）」

「……今日の授業はねー」

「なんか、観光地のお土産の話とかしてた」

「コラボグッズとかも多いよねって。

コレクションしたりとか ……かわいいの多いの」

「……レポート書くの楽しそう」

「はい、つぎ。くすりゆびね」

「左手の薬指……」

羽衣、私の左手に自分の左手を重ねる。

「……同じくらいかなあ」

「指輪もそのうち、欲しいよね」

「一緒に作るやつとか楽しそう」

「なんか、ハンマーで叩いて？ 形変えるやつ」

「わりとね、ちからわざで……（笑う）」

「でも、なんでもいいな」

「なくてもいいし、あってもいいし……」

「（爪やすりに集中した息遣い）……」

「……ん、よし」

「つぎ、小指」

「（磨きながら）この子は、すぐに……」

「（磨きながら）終わっちゃうな……」

「（磨きながら）ちっちゃいからねー……」

「はい、おしまい」

「じゃあ、反対の手っ」

羽衣、さらに私に身を寄せる。
私の右手をとる。

「（笑って）効き手を塞いじゃう」

「なんにもできない？」

「じゃあ、ひとりじめだ」

「（冗談めかして）……やりい♪」

「……また親指からいただきます」

「（集中した息遣いで）……」

「……………」

「まあく、まあく……」

「……うん。きれい、きれい」

「で、ひとさしゆびー」

「……あら、なんかささくれてる？」

「えー、痛そう……おーよしよし」

「そーっとやってく……そーっとね」

「（囁き声で）そーっと……そーっと……」

「（集中する息遣い）……………」

「……よーし」

「はい、なかゆびね」

「（集中する息遣い）……………」

「ん……」

「（磨きながら）この子も……つやつやに……するぞー……」

「……」

「……よし」

「はい、薬指ください」

「（磨きながら、歌うように）ぴかぴかに……なーれなれ♪」

「ぴかぴか、つやつや、すべすべ……」

「……ん、よしっ」

「いよいよ最後は小指ちゃんだ」

「（磨きながら）でも、この子は……」

「いちばんちっちゃん、から……」

「ん……」

「あ……」

「終わっちゃう……」

「……終わっちゃうー」

「はい、おしまい」

「おつかれさまでした」

「最後にね、オイルを塗りたいのでー」

羽衣、私と向き合う格好になる。

「おてて両方お借りします」

「ちゅーっと出してく」

「右からね」

チューブを押し、それぞれの指にオイルを出しながら、

「ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅっと」

「はい、塗ってく」

私の指先を親指から小指まで順番に揉んでいく。

「……ふふっ、くすぐったいか、さすがに」

「ちょっとだけがまんして」

「……………（塗りこむ息遣い）」

「……よしっ」

「で、左もー」

「ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、……ちゅっと」

「（嬉しそうに笑う）……ふふふふ」

ネイルオイルを馴染ませながら、

「あのねえ、最近好きな動画がね……」

「ペットの爪の手入れ？」

「犬とか、猫のね。爪切ってあげるやつ」

「すごい、もう。犬がね、完全に身を任せてるの。うっとりしちゃってさー」

「それ見てすごい癒されてたんだけど……」

「今、それと同じ気持ちを味わってる」

「（笑いつつ）……めっちゃ癒される」

「もうね、満足……すごく……」

「任せてくれて、ありがとーってかんじ」

「（お互いに笑う）……ふふふ」

「はい、じゃあ、おしまい。あー、楽しかったあ……」

「またね、じゃんじゃん爪を伸ばしてもらえればと」

「ね、そうしてもらえたらこちらも助かります」

「（ベッドを下りる）んしょっ」

羽衣、ケアアイテムを化粧台へ置く。

ふたり、布団にもぐる。

身じろぎして、お互いに寝心地のよい格好を探る。

しばらくして、ふたりとも落ち着く。

「ふー……」

「（囁き声で）……おやすみ」

「………」

しばらく穏やかな呼吸を続ける。

ふと思い出したように明日の予定の話をする。

「……明日はねえ、わたしは午後から」

「一緒に出ようか？ 合わせる合わせる」

「いいよ、午後までのんびりしてるし」

「でさ、朝ごはん外で食べようよ」

「あ、ほら。前に言ってた、学校のそばのカフェ」

「モーニングも美味しそうなんだよ」

「なんかね、分厚いトーストがね、もうね、ザクっとしてて……」

「で、ミルクバター？ 甘いかんじの……」

「……あー、寝る前にする話じゃないよこれ」

「決まり。明日はカフェっ」

「もう寝ちゃお寝ちゃお」

「……おやすみ」

「（明日が楽しみになって、笑う）……」

「（段々落ち着いていく）……………」

「（寝息に変わっていく）……………」

「……………」

【day5：金曜日】

【朝：約束のデート】

朝。

先に起きていた羽衣は、身支度をすべて済ませている。

まだ眠っている私を起こすため、今一度ベッドに上がる。

布団に潜り込むと眠ってしまうので、布団の上から私の寝顔を覗き込む。

「（寝顔を覗いて、ご機嫌に）……ふふふー」

「（囁き声で）お、は、よー」

「あーさーだーよー」

「もうちょっと寝てる？ んー？」

「寝ててもいいんだよ。二限からでしょ？ まだ時間ある」

「カフェも、いつでも行けるし……」

「……あ、起きた」

「（改めて）おはよう」

「わたしは、ふふ、この通り。出かける準備ばっちり」

「楽しみで起きちゃった」

「化粧もカンペキ」

「だって、今日はデートだし」

「朝ごはん食べるだけでもね、二人でお出かけはぜんぶデート（笑う）」

羽衣、ベッドを下りる。

クローゼットから私の着替えを選ぶ。

「どれ着る？」

ハンガーにかかった服をいくつか取り出して見せる。

「これ？ うん。いいね」

「顔洗っておいでー」

開け放ったドアの向こうから、羽衣の鼻歌が聞こえる。

「あさごはん、あさごはん。カフェでふたりであさごはん」

「着れたかい？」

「あ、リボンね。やったげる」

「はい失礼しまーす」

「（結びながら）……きゅーっと。できた！ はいかわいい、天才」

「はい座って」

「髪の毛梳かしてあげるから、そのあいだに顔作っちゃって」

化粧台の前に座る私。

羽衣は私の背後に立って、私の髪を梳かす。

「……………（髪をとかす息遣い）」

「うん、今日は寝癖はそこまでかな」

「（笑いながら）……お祭り騒ぎの日は、すごいもんね？」

「でも、レア度高い寝癖はテンション上がる。その日は一日ラッキーかもって」

「（笑って）寝癖占い。勝手に占っちゃう」

「（ご機嫌な吐息）……」

「ふふ」

「ヘアオイル、毛先につけとく」

「……（塗りこむ息遣い）」

「（軽く歌う）あさごはん、あさごはん。カフェでふたりであさごはん」

「（笑う）……よし」

「あ、そだ。夜はね、飲み会なので、帰り遅いと思う」

「うん。夜、戸締り気をつけてね。帰るとき連絡するからね」

「……お。できたね」

「こちらもトゥルトゥルに仕上がってますよ」

「やりのこしたことはない？ OK？ OK」

「じゃあ、出かけようか」

二人で部屋をでる。

【夜、わるだくみのプリン】

夜。

飲み会のため羽衣の帰りは遅くなる予定。
私は先にベッドに入ることに。

ほどなくして、玄関から物音。
羽衣が帰ってきた。

「（ほろ酔いで）たうだいまあ」

「たうだういゝまあゝ」

「（思い出して）……あ」

「（うがい）……ん、がらがら、ぺっ」

「がらがら、ぺっ……ふいー」

「（囁き声で）ねえ、ねえねえ」

悪だくみをしているような楽しげな羽衣。
ベッドのそばに膝をついて、寝ているあなたの顔のそばで囁く。

「おねえさんと一緒に悪いことしようよ」

「あのねえ……これね、ここだけの内緒の話なんだけど……」

「プ・リ・ン」

「……買ってきちゃったあ」

「ね、一緒に悪いことしよ？」

「……しないの？」

「ほんとにいい……？」

「ふうーん……そうなんだあ……」

「落ちる時は一緒だと思ってたんだけどなあ……」

「わたしだけが手を汚すってわけかあ……そうかあ……」

「――でも……？」

「コーヒー、淹れちゃうって言ったら……？」

「ミルクたっぷりで、カフェイン薄めにしとくよ……？」

「甘いプリンに、カフェオレ……だよ？」

布団をめくって頭を覗かせる私。

「……お？　お？　その気になってきた？」

布団のなかに頭を隠す私。

「えー？　まだだめえ？　なんで、なんでー」

構ってほしくてちよっかいを出す羽衣。

ちよっかいが嬉しくてわざと抗う私、羽衣に背を向ける。

羽衣はベッドの中に潜り込み、私を抱きすくめる。

「ねえねえ……一緒に食べようよ……」

「カワイイ瓶に入った美味しいプリンだよ……」

「プリン専門店買った、期間限定品だよー」

「食べないなら……わたしがふたつとも食べちゃうんだぞー？」

羽衣、自分自身を人質に取って脅すような調子。
酔っ払いのテンションで私に絡んでいく。

「飲み会のあと、深夜なのに、いいのかあ？ ふたつも食べていいのかあ？」

「わたしのことがかわいくないのか？ このこのっ」

私へふざけて襲い掛かる羽衣。

「……（ほっぺなどに）ちゅっ、ちゅっ、むちゅーっ」

「……はぁ。（満足げに）……まん、ぞく……」

「（眠たげに）おや……すみ……」

「（笑い混じりの深呼吸）………」

「（穏やかな深呼吸）………」

「……あ、やば、寝ちゃう」

「……あ、やば、寝ちゃう。違う違う、プリンだってば」

「（ぼやいて）あぶなかったー。罨だこんなの……」

ベッドを出る羽衣。

「よっしゃ。コーヒー淹れてくるね」

「プリンと一緒に、いい子で待ってて」

「（あなたの髪を撫でて、微笑み）……ふふ」

【day6：土曜日】

【朝、ゆっくり過ごす】

時刻はすでに昼近く。

ゆっくり眠る羽衣の傍ら、化粧台に座って私は作業をしている。

ハンドメイドアクセサリー作りが趣味の私。

ビーズを瓶に詰め替えている。

瓶は、夜中ふたりで食べたプリン空き容器を洗ったもの。

「……………」

目を覚ます羽衣。

「…………ふふ」

「…………おはよ」

「…………その音、スキ」

「しゃららーって…………ビーズの音」

「うん。いい音」

「（独り言っぽく）…………こんどは何を作るのかな」

「（独り言っぽく）手先が器用ですごいなあ……………」

「あ…………その瓶、昨日の？」

「プリンの？ 使ってくれるんだ」

「嬉しい」

「（私を眺めて、楽しげに）……ふふ」

「んー？ 見てるだけー」

「……」

「この時間、好きなの」

「好きなように過ごしてて、居心地よくて」

「わたしは寝てるだけだけどー……ふふ」

私は椅子から立って、ベッドのほうへやってくる。

「んー？ なになに？」

私、スキンシップしたくなって羽衣の隣へもぐりこむ。

羽衣に抱きつく私。

「んひゃーっ。なーにー？ もーっ。あはは」

「ビーズはいいの？」

頷く私。作業は中断し、羽衣を構う。

「……じゃあ、わたしも……うりゃうりゃうりゃ」

羽衣、私の頭をわしゃわしゃ。
布団のなかで、ふたりでごろごろしている。

「あははっ、よしよし。どしたどした」

「昨日、わたし酔っぱらってたから、寂しかった？」

「酔っ払って温度差あって寂しいよなーって？ ……思わないか？」

「……プリン、美味しかったね」

「専門店のってやっぱ違うよなあ……」

「それに、深夜だったし……深夜はなんでも割増しで美味しいからなあ……」

「（浸って）……ふー……」

「……お腹空いてきちゃった」

「お昼ご飯、何食べるー？」

寝返りをうつ羽衣。

枕もとに手を伸ばし、スマホを探る。

「ん……あれ……どこだー……」

「おー？ （見つけて）……あった」

「なーに食べようかなあ。どっか行く？」

羽衣のスマホを私も覗き込む。

「（スマホを眺め、お店などを物色しながら）んー、なんの気分かなあー」

「（スマホを眺め）んー……」

「（あくび）ふわあ……」

「……あー……」

「お腹空いてるのに……眠くもある……」

「……（笑い混じりの吐息）」

「（落ち着いた呼吸）……………」

「あーやばい、寝そうだった今」

「（笑って）……だめでしょう」

「わたしはともかく、出かける予定があるひとがいますよね？」

「そうそう。飲み会でしょ？」

「また出かけるまえにバタバタしてもいいのかなあ？」

「ね。……じゃあ、せーので起きようか」

「いっせーので。……いくよ？」

「いっ、せー、のお……」

間合いをはかるふたり。

「せっ……、せっ……」

起きると言いつつ、起きない。

「（笑って）フェイントだめだって……ほらあ」

「いっせーの？ ……せ……っ」

「起きたあ……っ」

体を起こす羽衣。私も起きて、ベッドを出る。

「よしよし、えらいえらい、えらいぞー」

「……顔洗おっと」

「で、お昼ご飯食べよ？　ねっ」

【夜、愛を揉みこむ】

夜。外出の用事から帰ってきた私。

連絡に返信がなかったため、

羽衣はすでに眠っている様子だと察して、静かに行動する。

シャワーを済ませ、寝室に入る。

そーっとベッドに上がる。

「……んあ」

目を覚ます羽衣。私に気づいて微笑む。

「あ、寝ちゃってた……」

「……おかえり……」

「（ハグしながら）ぎゅう……」

「もうお風呂入ったのかぁ？（匂いを嗅いで）んん、すう、はぁあ……」

「（ご機嫌に）これこれ……♪（切り替えて）……よし」

「……んしょ」

羽衣はベッドのなかをちよつと移動して

私が横になるエリアを確保する。私、ベッドの中へ入る。

羽衣、私が落ち着くのを待つ。

ふたり、向き合う。

「ふー……」

「（囁き声で）おかえり」

「待ってようと思ってたんだけど寝ちゃってたあ」

「今日どうだった？　なんの飲み会だったけ」

「ゼミ？　あ、違う、高校のお友だちとのやつ」

「どう？　たのしかった？」

「うんうん、よきよき」

羽衣に甘えてすり寄る私。

「なに、ちょっとくたびれてるの？」

「おーよしよし。飲み会って、楽しくても、お友だちとでも、疲れちゃうよねー」

「じゃーさ、おねえさんがマッサージするよ」

「そのために待ってたの。起きてるつもりだったのーっ」

「寝ちゃってたから、いま元気だよ」

「ほら、そこに。うつぶせになりなさいな」

うつぶせになる私。

羽衣、私の身体をまたぐ。

「（肩を揉みながら）よしよしよしよし……」

「おー、よしよし」

「ちよーっと凝ってますね」

「ん……（マッサージに集中する息遣い）」

「……ふふ」

羽衣のマッサージが気持ちいい。
私は身もだえする。

「（得意になって）きもちいいでしょ？」

「（揉みながら）ここかー？　ここかあー？　おー？」

「（笑い、息をつく）……」

「足のほうも、よく揉んでおきますね」

「（脚を揉みながら）よしよしよし……」

「揉みこんでおきますね、愛を」

「……（揉みながら笑う）」

「（反対の脚を揉みながら）よしよしよし……」

「こっちにもたーっぷり沁みこませておきまーす。愛をね」

「……（楽しそうにマッサージする息遣い）」

「……………」

「……ぼかぼかになった？」

「（あなたの顔を覗き込んで）あはー、眠そう」

「寝ちゃお寝ちゃお」

布団にもぐる羽衣。
ふたりで布団をかぶり直す。

「（落ち着いて）ふー……」

「（笑って）……ぎゅう……っ」

「……（笑い混じりの吐息）」

「明日は、まる一日、一緒に過ごそう。ふたりっきりでさー」

「どこにも行かないで、おうちのなか縛り」

「お掃除したり、お料理したり……？」

「……なんにもしないで二度寝もいいね」

「で、それぞれ好きなことやって……一緒に映画とか見たりして……で、一緒に風呂入ったりして、一緒に寝るの」

「まあまあいつも通りの生活だな」

「でもさ、そんなさ、かんぺきな日曜日をするんだ」

「だから……今日は寝ちゃお」

「……おやすみ」

「……（笑い混じりの呼吸）」

「（落ち着いた呼吸）………」

「（段々寝息になっていく）………」

【day7：日曜日】

【朝、二度寝のお誘い】

日曜日の朝。

先に起きていた羽衣が、そっとドアを開け寝室へ入ってくる。

「（囁き声で）おはよー」

「（囁き声で）お、は、よー？」

「……まだねむいかな」

「まだ寝てる？」

「……起きる？」

私は布団を持ち上げて羽衣を誘う。

「おっとお？ 添い寝のお誘いですか？」

「まったくー、こっちはせっかく早起きしたのに」

「キッチンのお掃除終わったし、
これからいよいよ素敵な朝食を作る予定なんですがー？」

布団に入るよう催促する私。

「そのテには乗りませんよー？」

「（真面目腐って）なんていったって、
わたしは『完璧な日曜日計画』を遂行するために綿密な計算を――」

羽衣、布団に潜り込む。言葉と行動がちぐはぐ。

私、布団に入ってきた羽衣を抱きしめる。

「（わざとらしく）し、しまったあ……!」

「うわあー、これは罠だあー」

「二度寝星人に捕まったあ……改造される」

「二度寝に抗えない体にされる」

「あああ……ぬくぬくするう……」

「おふとんフカフカでおひさまポカポカでぬくぬくするう……」

「無理い、こんなの無理い、だめえ……」

布団のなかで、私、逃げようとする羽衣を背後からハグする。

「あー、あー……」

「んあ……うにやうにやうにや……」

眠たくなってくる羽衣。

「かんぺきな日曜日の計画が……」

「……でも」

「二度寝するのも、最高……だよー……」

「うん……ん……」

「（眠たくなっていく）……」

「……………」

「（寝息に変わっていく）……………」

【夜、寝る前のおたのしみ】

夜。お風呂上がりの二人。

寝室に入る。

私は、化粧台の上に用意された道具に気づく。

「これね、買ってみちやいました。憧れのアロマオイルセット」

「かわいくない？」

「ポットにオイルと水入れて、蠟燭で温めて、
あったまると段々匂いがフワワって……なるらしい」

羽衣、説明しながらアロマポットとウォーマーの用意を始める。
蠟燭をセットする。

「蠟燭に火をつけてえ……（火をつける）」

「よしっ」

「で、オイルをポットにちよつとだけ、ちょんちょんと……」

「で、温まるのを、待つ」

「そのあいだに、髪を梳かす」

「髪にはヘアオイルをつける」

「……この家、オイルがいっぱいある」

「（匂いを嗅いで）……はー」

「いい匂いのオイルは、ありすぎて困ることはないな……」

「座って座って」

羽衣、ベッドに上がって、私の髪の手入れ。
私の髪にヘアオイルを馴染ませる。

「（鼻歌）　　♪」

「（毛先の毛束を手にとって）んー？　　うんうん……」

「毛先のダメージケアを念入りにしちゃおう……日曜日だし」

「一週間お疲れ様ーって」

「（馴染ませながら）いつもより多めに塗り込んでいます」

「……………（オイルを馴染ませていく息遣い）」

「……………よしっ」

「（櫛でとかしながら）つやつや、とうるとうる……」

「（匂いを嗅いで、微笑む）……いいにおい」

「でーきた」

オイルポットのほうを意識しつつ、匂いをかぐ羽衣。

「……すんすん。こっちからも、いいにおいだ」

「蝋燭も、眺めるの好き」

「……寝落ちしてもだいじょぶだから。2時間とかで燃え尽きて消えるやつ」

「……（笑い混じりの吐息）」

「……………」

ふたり、蝋燭を眺める。

「……なんか飲む？」

「うん。持ってくる」

「温かいやつ？　おーけー」

「いいコで待ってて」

ひとりで待つ私は、ベッドに寝転がる。

少しすると、羽衣が戻ってくる。

「あーけーてー」

ドアを開ける私。

羽衣はトレーを持っている。

トレーの上にはポットとカップ。

「ありがとうー」

「（笑って）両手塞がってた」

「お茶いれるねー」

「（軽く匂いを嗅いで）あ、いい匂いしてきてる」

「アロマオイルの匂い。ちゃんとしてる、フワ〜って。すごいー」

「さてこっちは……茶葉開いたかな？」

「こっちもいいにおいだし……」

「いいにおいの渋滞だし」

「……（匂いをかいで笑う）」

「いれまゝす……」

羽衣、ふたつのカップに交互にお茶を淹れていく。
味の濃さが均等になるように。

「（注ぎ終わって）……うん」

「さー、どうぞどうぞ」

「……熱いよ？ 気をつけて」

私、カップを受け取る。

羽衣もカップを手取る。

「（息を吹きかけて冷ます）ふー、ふー……」

「……ずずっ……（嚥下）」

「（ほっとして）あゝ……」

「おいし」

「……はあ」

ふたり、まったりとお茶を飲む時間を過ごす。

「……………（嚥下）」

「ふう……」

「……」

「おかわりいる？」

「ん。またあとで飲みたくなったら言って」

私のカップを受け取り、化粧台に置く。

「はー……よいしょっ」

羽衣、ベッドに身を投げ出す。

私の隣へやってくる羽衣。

私のほっぺたにほっぺをくつつけるように、じゃれつく。

「（じゃれながら）んんんっ」

「……（笑い混じりの吐息）」

「来週さー、どっか行く？」

「今週どこも行かなかったから」

「……（笑い混じりの吐息）」

羽衣と私、ベッドに寝転がって向かい合う。

羽衣は私の髪の毛先をいじり、ご機嫌な様子。

「お買い物……欲しいものは……なくもない」

「気になるカフェも、あるにはあるけど」

「見たい映画も、始まってるかも……？」

「……まあ……来週の気分でもいいか」

「今はお金溜めといて、そのうちぱーっと、旅行するのもよい……」

「……」

「おうちにずっといるの、楽しいんだよなあ……」

「ずっと一緒に嬉しいし……」

「……………」

「……（唇にキス）」

「……（笑い混じりの吐息）」

「（満足して）はあ……」

「もう寝ちゃう？」

「からだばかりかきもちいい……」

「ふふ……」

「蠟燭消しておこうと」

羽衣はベッドの上を這うように移動。
化粧台の上、アロマポットにセットしていた蠟燭の火を消す。

「（火を吹き消す）……ふーっ」

「……（笑って）蠟燭消すの好き」

「電気も消すー」

布団にもぐるふたり。

「……（嬉しそうな吐息）」

「（囁き声で）おやすみ」

羽衣の手、布団のなかをがさごそと探る。

「……んー？ いま探し物してて……」

「スマホじゃなくてー」

「あ、あったあった」

私の手を見つけて、手をとる。

「これを探してた。かわいいおてて」

布団の下、羽衣は指先で私の指を撫でる。

「（指を撫でながら）爪の先まで、すべすべ……」

手を繋ぐ。

「こうやって、朝までぎゅーってしてようかな」

「……（笑って）試してみよう」

「……（落ち着いた呼吸）」

「（さっきよりも囁き声で）……おやすみ」

「……………」

「……………」

呼吸、段々落ち着いて、寢息に変わっていく。

【First Day：ふたりの寝室】

ふたりがこの部屋に引っ越してきた当日のエピソード。

まだなんの家具も配置していない、からっぽの寝室に入るふたり。

部屋をゆっくり歩きながら、

「（見渡して）やっぱり日当たりいいねえ」

「ひろ～い……」

「（笑って）まだなんにも置いてないからね」

「これ……カーテン、丈足りる？」

「まあ、つけてみてだな」

窓辺へ近づく。

「（窓を開ける）ん……」

「おおー……」

「うん……（嬉しくなって笑う）」

「……ふふ」

「ここがふたりの寝室。……いいね」

窓辺を離れ、部屋を歩きながら。

「家具、予定通りに入るかな」

「一応サイズ測ったけどねえ……」

「クローゼット……広い広い」

「いっぱい入りそう」

「（冗談で）……ここを私の部屋にしようかな？」

「秘密基地にする（笑う）」

「で……ここに化粧台置いて、あっちに棚置いてー」

「そのうち、テーブルとか買おうかな？　ちっちゃいやつ」

「寝る前にお茶とかしたりする」

「（笑って）……ベッドの上でしちゃうかもだけど」

「なにか、いいのが見つかったらお迎えしよう」

「……で、ここにベッド」

「セミダブルだから、おっきいよ」

「組み立ては、やってもらえるから、プロに任せよう」

「……今、試しに寝てみる？」

「（笑って）……床だけど」

床に寝転がるふたり。

「（寝転がって）んしょ……」

「おお……なんか天井高い」

「おひさまポカポカだぁ……」

「……床に寝るのも気持ちいいね。床もぽかぽかしてる」

「（笑い混じりの吐息）……………」

「……（深呼吸）」

ふたりとも、何も言わない。

これからのことに思いを馳せるような沈黙。

羽衣、今日から同棲が始まることをしみじみと噛みしめる。

「ほんとにここで暮らすんだ。……一緒に」

「この町にも、学校にも、私のこと知ってるひとはいないんだ」

「私たちのこと、誰も知らないんだ」

「……それってなんか、ふたりっきりってかんじだ」

「（笑って）……ちがうけど、なんかそんなかんじ」

「（囁き声で）これからよろしくね。ふたりぐらし」

「毎朝、おはようって言ってさ、寝るときは、おやすみって……（想像して笑う）それが毎日……ずっと続くの」

「待ち合わせをしなくても、毎日会えるよ」

「（噛みしめて）……は、最高だ」

「……幸せってやつかも」

寝転がったまま伸びをする羽衣。

「あゝ……」

「バイトがんばってよかったあ……」

「（私に抱き着いて）これからも頑張るけどお……」

「ほんと、嘘みたい。夢みたい。うれしい」

「……大好き」

「ありがとう」

「……（頬や唇にキス）」

「（笑って）引っ越し記念のチュー……」

「引っ越し、まだなにも終わってないけどね」

「……（笑う）」

「……あ。引っ越し屋さんきたかも」

「行こっ」

立ち上がる羽衣。

私は羽衣の手をとり立ち上がる。

ふたりで玄関へ向かう。